

## P-621 胸腺カルチノイド術後の肺転移再発に対する外科治療

長崎大学第一外科

○辻 博治、綾部公誌、新宮 浩、山本 聡、  
永安 武、岡 忠之、原 信介、田川 泰

胸腺カルチノイド術後経過観察中、肺内腫瘍陰影の増大を来したため肺転移を疑い外科治療を行った症例を経験したので報告する。

症例は45歳男性。平成3年8月、胸腺腫の術前診断で胸腺胸腺腫切除、左肺部分切除、左横隔神経合併切除を施行し、最終病理診断は胸腺カルチノイドであった。術後50 Gyの放射線治療施行後、外来経過観察を行っていた。平成5年8月、右下肺野に2.5×1.5 cmの腫瘍陰影出現し、肺転移を疑い全身遠隔転移検索を行ったところ、前頭骨への転移も疑われ多発転移としてVP-16 (50mg/d, 2隔週)の化学療法を開始した。以後、平成6年11月まで腫瘍陰影の変化は見られなかったが、平成7年2月右下肺野に浸潤影の出現を認め、平成7年8月には腫瘍陰影の増大と、右S<sup>9</sup>領域のconsolidationを呈するに至った。精査加療目的で10月入院。気管支鏡でB<sup>9</sup>入口部にポリープ状に突出する腫瘍が直視可能であり生検を行ったが壊死組織であり、病理診断を得るに到らなかった。胸腺カルチノイド肺転移の疑いで11月7日右下葉切除を行った。最終病理診断は胸腺カルチノイドの肺転移であった。

## P-623 シェーグレン症候群合併胸腺原発 low-grade B-cell lymphoma of mucosa-associated lymphoid tissue (MALT) の1例

聖隷三方原病院 聖隷呼吸器センター外科

○山田 健、佐野正明、成田 守、石黒秀行、  
水野武郎

【目的】MALT type の悪性リンパ腫は消化管より発生することは一般的に知られており、稀に肺や唾液腺や甲状腺からも発生する。しかし胸腺原発の MALT lymphoma の報告は数例のみで、非常に稀である。今回シェーグレン症候群合併の胸腺原発 MALT lymphoma の1例を経験したので報告する。

【症例】患者は46才、女性。主訴は四肢のしびれ感。入院後検査にてschirmer's test 陽性、RA 因子陽性、抗SSA抗体陽性でシェーグレン症候群と診断された。また胸部CT検査では胸腺に4×6×1.2cmの充実性腫瘍を認め、また頸部に囊腫を認めた。以上より胸腺腫等を疑い1995年6月20日手術を施行した。手術は拡大胸腺摘出術および頸部囊腫摘出術で、術後標本より、MALT lymphoma および胸腺囊腫と診断した。病理標本では密なりンパ球浸潤を伴い多数の囊腫およびHassall小体を認め、リンパ球はB-cell type であった。また血管周囲は結合織や線維化により隔壁化されていた。

【結語】胸腺原発の MALT lymphoma の発生は、Hassall小体の上皮がその起源において mucosa と類似しており、同部より発生したものと考えられた。

## P-622 胸腺関連悪性腫瘍9例の臨床的検討

千葉大学肺癌研究施設内科<sup>1</sup>、同保健管理センター<sup>2</sup>、  
同病理<sup>3</sup>

○宮澤 裕<sup>1</sup>、滝口裕一<sup>1</sup>、杉本尚昭<sup>1</sup>、須田 明<sup>1</sup>、  
飯岡義教<sup>1</sup>、大森繁成<sup>1</sup>、森谷哲郎<sup>1</sup>、長尾啓一<sup>2</sup>、  
廣島健三<sup>3</sup>、大和田英美<sup>3</sup>、栗山喬之<sup>1</sup>

【目的】当科で経験した胸腺悪性腫瘍の臨床像について検討した。【対象】1987年10月より1996年4月の期間に当科に入院した胸腺腫5例と胸腺癌4例を対象とした。【結果】胸腺腫は男性2例、女性3例。年齢25~53歳(平均39.8歳)。正岡分類のI期1例、II期1例、III期1例、IV a期2例で、III期までの3例に手術を行った。うち2例には術前に化学療法、術後に放射線治療を行い、1例は治療終了4ヶ月後に合併症で死亡したが、1例は7年間生存中である。IV a期2例中1例は化学療法と放射線治療を施行後、8年2ヶ月間生存中であり、1例は他院治療中である。胸腺癌は男性3例、女性1例。年齢50~57歳(平均53.8歳)。組織型は扁平上皮癌2例、未分化癌1例で、1例は組織判定できなかった。3例に鎖骨上窩りンパ節転移または骨転移を認め、残り1例も胸水、心嚢水の貯留を認めた。全例に化学療法が行われたが、1例が化学療法中に合併症死し、残り3例中2例もNCだった。放射線治療を行い、1例のみ5年2ヶ月間生存中である。

【結語】胸腺腫は、進展例でも集学的治療により長期予後が得られていた。胸腺癌は、発見時すでに進行している症例が多く、治療効果も不良だった。

## P-624 縦隔肉腫8例の臨床的検討

岡山大学 第二外科

○向田尊洋、源 寛二、市場晋吾、青江 基、岡部和倫、  
山下素弘、伊達洋至、安藤陽夫、清水信義

【目的】悪性縦隔腫瘍の中でも縦隔肉腫は希な腫瘍である。今回我々は縦隔肉腫8症例に対して検討を行った。

【対象】1965年から1995年までに当科で治療を行った縦隔腫瘍は341例で、そのうち縦隔肉腫は8例(2.3%)であった。縦隔肉腫の内訳は脂肪肉腫4例、平滑筋肉腫2例、横紋筋肉腫1例、軟骨肉腫1例であった。

【結果】縦隔肉腫症例の男女比は1:1で、平均年齢は48.9歳(14~77歳)であった。全例に摘出術が施行され、胸腔内播種を伴う横紋筋肉腫1例を除き、完全切除が可能であった。摘出腫瘍の平均重量は516g(180~1085g)で、大型のものが多かった。化学療法と放射線療法を術後2例に、再発例1例に対して施行したが効果は認めなかった。局所再発または遠隔転移を5例に認め、このうち2例に対して再手術を施行した。再手術例はいずれも脂肪肉腫で、1例は遠隔転移に対して計7回の切除を施行し、1例は局所再発に対して再切除を施行した。予後に関しては4例が死亡し、最長生存期間は75ヶ月であり、10年生存は得られなかった。

【考察】縦隔肉腫は希な腫瘍であるとともに、極めて予後不良である。化学療法や放射線療法などの集学的治療も無効例が多く、現段階では外科的切除が原則である。初回手術だけでなく再発例に対してもできる限りの完全切除を試みるべきだと思われた。